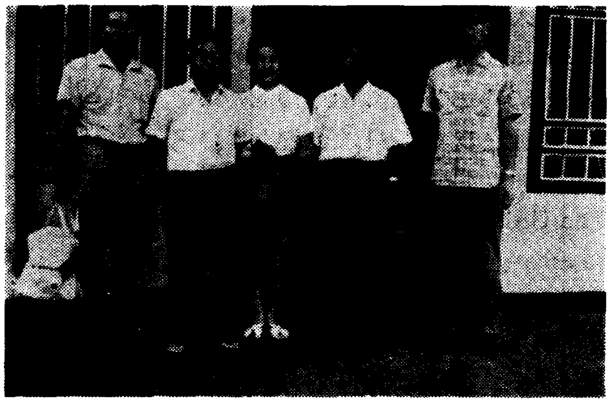
タイで話されているチベット・ビルマ系諸言語についてのデータの収集に従事する予定である。

以上の若い研究員たちは，いずれも自己の研究テーマについて，意欲的にとりくんでおり，将来相当の研究成果をあげることが期待されている。

相良惟一は，研究テーマとして東南アジアにおける教育構造の比較研究という問題を持っている。幸いにして，バンコックには，ユネスコのアジア地域の教育振興のプランをねっている地域事務所があるので，それと密接な連絡をとりつつ，研究を進めている。なお，それにかんするタイ国文部省やユネスコ国内委員会の協力をも得ている。なお，現在は，タイ国における宗教と教育との関係，あるいはタイにおける仏教やキリスト教がこの国における教育発展のためどのような役割をはたしているかということについて調査をすすめている。なお，相良はバンコック連絡事務所の用務を遂行しているほか，各地に散在する研究員と連絡のため，まずチェンマイにおもむいた。そして，上述のように，同地で予備調査に従事しつつある飯島茂と連絡をとったほか，同地附近に居住する山地住民メウ人，カレン人の二つの部落におもむき，これらの住民のタイ化について教育がどのような役割をはたしているかについても調査をおこなった。

最後に，マレーシアにおける京大東南アジア研究センターの部員による調査研究について一言する。6月初旬，棚瀬襄爾文学部助教授，吉田光邦人文科学研究所



マレーシア，アロール・スターにて

助教授は，バンコックを経て，クアラルンプールにおもむいたが，現在は，マレーシア北部のケダー州の要地，アロール・スターにいちおう基地を設け，さらにそこから十数キロ離れたアロール・ジャングス部落において，前記棚瀬助教授が，口羽益生，坪内良博の二人とともに，調査を行ないつつある。他方，前田成文は，クアラルンプールにあるマラヤ大学文学部に入学し，マラヤ語の習熟につとめつつある。七月下旬，相良惟一は，マレーシアにおもむき，マラヤ大学，マレイシア文部省を訪問したほか，アロール・スターに棚瀬助教授の一行をおとずれ，事務連絡を行なうところがあった。

（東南アジア研究センター，バンコック連絡事務所にて）

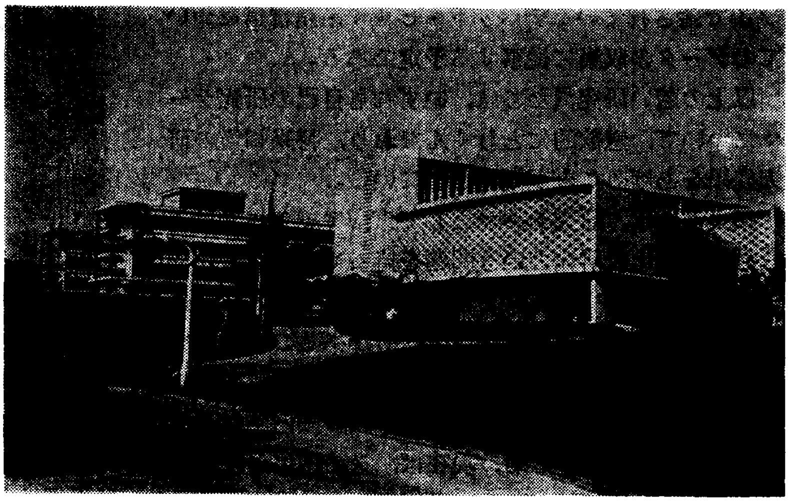
マラヤ大学から

前田成文

マラヤ大学はおよそ650エーカーの谷・丘・湖のある土地をクアラ・ルンプールの西南に有している。ここにポツンポツンと近代的で斬新な建物が舗装された道路の傍に結び目のように続いている。林やしげみの他には，ほとんど植樹がされていないので若干淋しい気もするが，芝生が一面にうえられて良く手入れされている。

マラヤ連邦が独立国となった1957年に，シンガポールのマラヤ大学の分校として，クアラ・ルンプールに人文学部の1年生が，Technical College の一隅をかりて学び，翌年に現在の大学の位置する Pantai Valley に工学部の建物が新設されて，100人の工学部学生を収容した。1959年シンガポールが自治領として成立するのに伴い，クアラ・ルンプールにマラヤ連邦

唯一の大学として，The University of Malaya in Kuala Lumpur の名のもとに，人文,工学，理学の３学部をもって独立の大学として出発した。同時にシンガポールの古いマラヤ大学もThe University of Malaya in Singapore とされた。1961年には，両者をマラヤ大学，シンガポール大学と各々呼ぶことになった。マラヤ大学はその独立後急速な発展をとげ，上記の外に，農学，医学，教育学（１年間の Diploma コース）を加えて，マレーシアの教育の中心になりつつある。



文学部と教育学部の建物

第２表によると，学生の60％が中国

第 1 表　クアラ・ルンプールにおける学部別学生数の増加

年　度	人文学部	工学部	理学部	農学部	医学部	教育学部	計
1957	256						256
1958		100					100
1959	163	129	31				323
1960	354	159	114	27			654
1961	556	198	203	53			1010
1962	838	246	346	79			1509
1963	908	257	398	99	40	34	1736
1964	1148	308	431	101	109	86	2183

（注）本年度の数字は確定的なものではなく，最終的には2300人前後の学生数であるという。

第 2 表　人種別学部別学生数

	文学部		工学部		理学部		農学部		医学部		教育学部		計		総計	%
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
マレー人	242	68	2	—	16	2	10	1	7	—	4	6	281	77	358	20.62
中国人	219	181	221	—	240	62	72	4	24	4	5	10	781	261	1042	60.02
インド人	82	45	21	—	35	12	10	—	4	—	2	—	154	57	211	12.16
セイロン人	12	2	4	—	4	2	—		—	1	—	1	43	32	75	4.32
ユーラシアン	9	9	1	—	4	1	—		—	—	—	—	20	6	26	1.50
その他	17	22	8	—	14	6	2		—	—	2	4	14	10	24	1.38
計	581	327	257	—	313	85	94	5	35	5	13	21	1293	443	1736	100
	908		257		398		99		40		34					

（注）1963年 Student Statistics による。

人で，マレー人は僅かに20%，インド系の学生が15.5%という数字を示している。マレーシア全体の人種別人口比率と比較して，マレー人学生の率が非常に少ないことが注目される。これは学生の出身地を考えてみても，各州の人口に比例した学生数ではなく，中国人・インド人の多い州，いいかえれば「都市」の多くある州から沢山の学生がきている。参考までにシンガポール大学における人種別の学生数の比率を掲げておく。（第3表）

第3表　シンガポール大学人種別学生比率

1962年度

人　　種	比　　率
中　国　人	78%
イ ン ド 人	12%
マ レ ー 人	4%
ユーラシアン	1.7%
そ　の　他	1.3%
計	100%=2166

学部別の学生の分布を見てみると，マレー人のうち，86.6%までは人文学部に学ぶという偏重を示している。人文学部は，中国研究，経済学，英文学，地理学，歴史学，インド（タミール語）研究，イスラム研究，言語学，マレー研究，数学の各学科から構成されている。このうち，中国，インド，マレー研究は，Cambridge School Certificate の各語学の試験の単位を取らねば入科できないことになっている。中国研究を第2，第3学年で専攻する学生が昨年，今年と零であるのに対し，マレー研究は88人も専攻している。インド研究は第2，第3学年で8人の専攻者がある。学生の側から見ると，将来の就職に対して中国，インド研究はほとんど用をなさないが，マレー研究の場合は，たとえ第2，第3学年で専門として学ばないでも，その単位をとっていること自体が，就職（ことに政府関係）に非常に有利になるそうである。本年度の第2，第3学年の1学科専攻学生は第4表の通りである。マレー研究は，二人の中国人を除いて全部マレー人である。

第4表　1964/5年度クラス配偶表（人文学部）

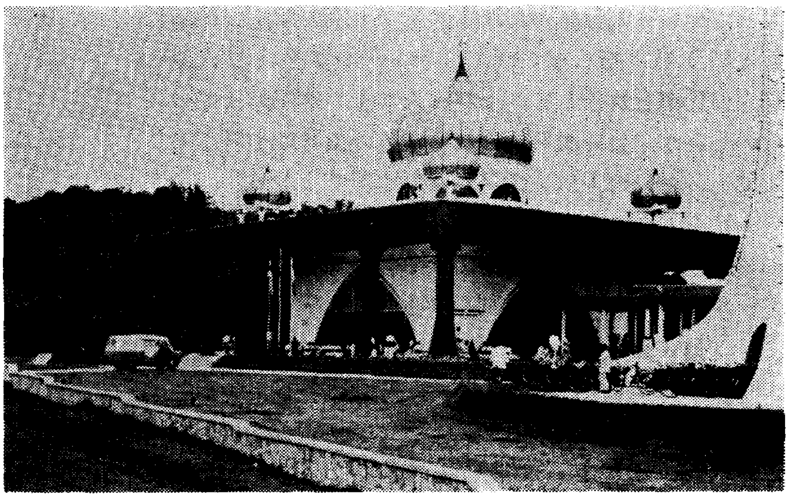
	経済	英文	地理	歴史	インド	イスラム	マレー	数学
第2学年	35	20	61	52	1	5	39	3
第3学年	53	17	32	46	5	5	28	2

（注）第1学年では3学科を選択して学習し，成績の良いものが2，3年で1学科を専攻して B. A. Honors Degree を得ることができる。本表は第2，第3学年の1学科専攻学生数だけである。

工学部と寮が中央から左半分に見える。

マレー研究科は，昨年まで Roorink 教授が同学科を率いて，文学・言語・文化を中心とした総合的な教育を行なっていたのを，今年度からは陣容も新しく，教授に S. Takdir Alisjahbana（インドネシア人）を擁して，J. J. Ras 講師を除いては，すべてマレー人の若手学者で講師陣をうめ，専攻コースも①文学，②言語，③文化，④総合の四つにはっきりと区分された。この学科の講義だけは，すべてマレー

語でなされる。(その他は，中国研究，インド研究の若干の講義を除いて全学部とも英語が使用されている。)しかし率直にいって，とくに文化コースなどは，講師が英語からマレー語に飜訳した講義を，学生がもう一度英語の文献にあたって考えなおしてみるという状態である。しかし常にマレー人としての研究態度を意識的に保持しようとしており，学ぶべき点も多い。



大学モスク。金曜日には，学生や近所のイスラム教徒が大勢集まる。

教育媒体ということに関しては，マレーシアの国語化運動との関係が問題となる。本年も政府は5月24日から8月15日までを国語月間として巨額の金額を投じて，マレー語化を一般に普及しようとしている。大学でも，ささやかな試みではあるが，本年度から地理・歴史・経済などの講義を英語とマレー語の両方どちらでも聞けるようにしようとする案もある。このような2言語併用から徐々にマレー語に移行しようという案も，それを施行するのに相当の年数がかかりそうである。まず第一に講師陣の不足ということがある。それと関連して学生の側の理解の問題が加わってくる。現在のシステムでは英語能力だけが入学の基本条件となっているので，学生のなかには，マレー語を充分話せないものもあることはある。ともかく，大学教育のレベルでは，この数年間の内にマレー語講義が全学部で行なわれるとは到底考えられない。

マレー語化を1967年までに完全に施行することに対しては，マレー人の学生でも悲観的な見方をするものが多い。その上，国語化の期限がせまるにつれて，マレー人側のあせりと，中国人側の政治面における被圧迫感とがいよいよ激しくなっていくのではないかという見通しも，最近のブキット・ムルタジャムやシンガポールでのマレー人・中国人衝突事件を見ていると可能なように思われる。両者ともごくささいなことから，両人種グループの争いということにまで発展したのであるが，その背景には，もやもやとしたガスが常に渦巻いて存在しているように見える。

大学内では，英語をきずなとして学生は堅く結びついているように見えるが，各人種毎の断層は彼らの行動に，意識的ではないにしろ，あらわれてくる。たとえば大食堂で食事をするのに，マレー人学生と非マレー人学生とは，いつのまにか完全にわかれてしまっている。また，寮の部屋は二人共通なのであるが，マレー人，中国人とも同じ人種のものとは自由に行き来するが，相互の部屋を訪ねるということは少ない。また，二人のうち両方ともマレー人であると，片一方が他の人種の学生であるよりもずっと行き易いらしく，そのような部屋が，日常のたまり場のようになってくる。原因は単に人種の相違だけにあるのではないことは確かである。先に述べたように学部・学科毎にかなり人種別のかたよりがあることと，マレー人学生の方が，一つにはマレー語の講義を共通にしてその言語を使用していることも，第二に他の人種の学生に対する何らかの劣等感をもっていて，より sect 主義を発揮することにも原因がある。インド人・中国人の方が，マレー人よりも活発で社交的な感じをうけるが，女子生徒の場合，一番伝統的なのはインド人の女性のように見える。男子学生がほとんど洋服ズボンというスタイルに対して女子学生の方は各々母国の服装をすることが多いのもおもしろい。

マレーシアは，いわゆる複数社会といわれ，各セクターがそれぞれの文化の伝統を保持して，相互間に積極的な融合がみられない所に特徴があるといわれるが，大学という特種なコミュニティの中においてさえ，個々の文化的態度が無意識にあらわれてくる。極端にいえば，マレーシア独自の文化が育っていないともいえる。新しく希望にもえるマラヤ大学に総合文化創造の役割を期待したいものである。